

編集委員会から

量記号について

食品工学の分野においても他の自然科学系の諸分野と同様に定量的な情報を伝えることが必要となる場合が多くあります。日本食品工学会誌では量記号と単位の表記について「原稿執筆の手引き」に下記のようにお願いしています。

7.2.6 量記号と単位

量記号と単位はそれぞれイタリック体（斜体）とローマン体（立体）を用いる。単位は、原則としてSI単位を用いる。数式が多い文章などには必要に応じて記号説明（本文が和文でも英文で書く）を本文または謝辞のあとに設ける。記号、説明、単位は、左揃えとする。（以下の例を参照）

NOMENCLATURE

C_p : isobaric heat capacity, $\text{J} \cdot \text{mol}^{-1} \cdot \text{K}^{-1}$

T : absolute temperature, K

V_m : molar volume, $\text{m}^3 \cdot \text{mol}^{-1}$

α : thermal expansion coefficient, K^{-1}

κ_T : isothermal compressibility, Pa^{-1}

ρ : density, $\text{kg} \cdot \text{m}^{-3}$

（注：量記号は「斜体1文字（+立体の下付き文字）」で表記する。無次元数の Re などは別扱い。）

一方、投稿者の方々のバックグラウンドは幅広く、投稿原稿での量記号の表記にはバリエーションが見られます。現状の日本食品工学会誌掲載論文では統一されていない箇所もあるのですが、編集委員が量記号や単位の表記について修正をお願いした場合はご協力ください。

量記号は一般的に用いられる記号を用いると他の分野の方にも情報が伝えやすくなります。「原稿執筆の手引き」7.2.6に書かれているのもその例ですが、それ以外にも、水分活性の a_w 、拡散係数の D 、流束の J などがあります。一般的な化学分野の量記号については、日本化学会の単位・記号専門委員会が「化学と工業」誌に掲載されている「化学で使われる量・単位・記号」などを参考にしてください。

<https://www.chemistry.or.jp/activity/international/#unit>

臨床化学分野向けですが、H. P. Lehmann, X. Fuentes-Arderiu, L. F. Bertello; Glossary of terms in quantities and units in Clinical Chemistry (IUPAC-IFCC Recommendations 1996), Pure Appl. Chem., 68, 957-1000 (1996) も参考になると思います（国際単位系SIでの物質量の定義が2019年に変更されたので一部注意が必要です）。

<http://publications.iupac.org/pac/68/4/0957/index.html>

原稿ご執筆時に量記号にもご留意ください。

（新潟大学 田中孝明）